

メイド雇用がもたらす母親業への影響

——フィリピンにおける日本人駐在員家庭の主婦の場合

山本 理子

(京都大学非常勤講師／立命館大学非常勤講師)

2012年11月



京都大学グローバル COE

「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」

Global COE for Reconstruction of the Intimate and Public Spheres in 21st Century Asia

〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学大学院文学研究科

Email: intimacy@socio.kyoto-u.ac.jp URL: <http://www.gcoe-intimacy.jp/>

1. はじめに

家事は誰がやるのか。総務省統計局が2006年に実施した「平成18年社会生活基本調査」では、行動の種類ごとに、ライフステージ別の生活時間および行動者率について調べている。それによると、家事関連時間は2時間8分、男性は38分、女性は3時間35分である。1986年～2006年の20年間で、家事関連時間は男女差がやや縮小している（15歳以上の男性においては21分増加、15歳以上の女性においては16分減少）ものの、依然として男女差は大きい。また末子年齢と女性の家事関連時間には強い関係がある。子育て期（末子が就学前）は、ほかのライフステージに比べて女性の家事関連時間が最も長く、週全体平均で7時間16分（うち育児は3時間1分）にもものぼる（同条件の男性では56分（うち育児は31分））。子どものない既婚女性では4時間17分（うち育児は6分）であるから、子育て期の女性は育児に手がかかる分、家事関連時間が非常に長いことがわかる。また子育て期の世帯においては、自ら家事を行っている女性は98.1%（同条件の男性は25.2%）、自ら育児を行っている女性は88.6%（同条件の男性は36.7%）となっている。つまり、就学前の子どもをもつ世帯では、基本的に母親でもある主婦が自ら家事育児を担っており、その負担は大きい。

では、家事・育児の代行を利用してはどうだろう。とくに先に述べたように家事関連に多くの時間を費やしている子育て期の主婦は大助かりに違いない。アジア諸国をはじめ、多くの国では家事育児の負担を軽減する手段として家事労働者が雇用されている。とくに、経済の成長が著しい台湾や香港、シンガポールといった国では、現地の女性を雇う形から海外からの出稼ぎ女性を安く雇用するという形に変化しながらも、家事労働者は前近代からポスト近代にかけて継続して社会に存在し続けている（Constanble 2007, Lan 2006, 上野 2011）。

一方、日本では戦後まもなくまで家事労働者という職業は珍しくはなかったが、高度経済成長期に主婦が大衆化するとともに急減し、一般の家庭ではほとんど見られなくなった（清水 2004: 205）。ただし、現在の日本においても、家族により行われてきた炊事、洗濯、掃除、買い物などの家庭生活に関わる作業を代行するサービスはいくつも存在する。保育や介護を除くこのような家庭生活サポートサービスの市場規模は試算で2800億円と推計されており、今後女性の就業拡大とともにさらにその市場規模は拡大すると考えられている（武田 2010: 4）。野村総合研究所が2011年6月に実施した「家庭生活サポートサービスに関するアンケート調査」によると、これらのサービスの認知度が総じて高い一方で、その利用率は生協やネットスーパーに代表されるような食品・日用品の宅配サービスの利用率が約2割である以外には極めて低い。利用経験がない人が利用しない理由として「価格が高いと感じる」「家族内で対応できており、必要性を感じない」「他人に家の中に入られることに抵抗がある」が上位を占めており、家事の代行には経済的抵抗感と心理的抵抗感が存在する（武田 2010: 5）。近代家族の形成を経験したのちの現代日本人にとっては、私的領域に他者が入り込んで家事を行うことはなじみの薄いものである。

しかし実際には、日本国内では家事の代行を経験することがほとんどないような日本人

でも、家事労働者の雇用が一般的な国に赴任すれば家事労働者を雇用する人もいる（西 2004）。では、近代家族形成後の日本人主婦の視点から、家事労働者の雇用はどのように経験されるのだろうか。本研究では、フィリピン・メトロマニラ・マカティ市に住む日本人主婦を対象におこなったインタビュー調査をもとに、子育て期の主婦と子どものいない主婦が、それぞれ家事労働者の雇用および家事の代行についてどのように捉えているのか比較しながら、子育て期の主婦が家事育児の実践と家事労働者の雇用をどのように関連づけているのかを考察する。

2. 問題の設定

日本は先進諸国のなかでも、年齢別女性労働力率のグラフが出産・育児期に低下し育児後の再就職によって上昇するというM字型カーブを韓国に並んでとくにはっきりと描く国である（内閣府 2007: 20）、このような傾向は性別役割分業規範の強さを示している。日本では、明治末から大正期にかけて、都市の新中間層において「近代家族」が成立したのちに、1960年代以降に「近代家族」は大衆化した（落合 1997: 43-48）。近代家族が大衆化した時代とは、男は仕事、女は家庭という性別役割分業が大衆的に普及した時代であり、子どもをもつ主婦が情緒的なケアラーとしてとくに乳幼児期の子どもとの排他的な関係を築く重要性が強調されはじめた時代でもある。品田知美の研究によれば、1980年代以降子育ての技法が転換したといわれ、親が子どものペースに合わせてより手をかけるという「極端な子ども中心主義」が拡大したという（品田 2004: 134）。同じ時期、母親の育児不安も社会問題として認知されるようになり、母親たちは母親だけではない自分を求めるようになった。また、山根真理は都市近郊の母親意識のデータ分析から、「子どものための自己犠牲や母性愛、子ども問題に対する母親の責任など、近代以降に浸透した母親規範は現代の母親にも強く内面化」されて維持されており、「母親でありつつ自己実現を求める意識」は近代的母親意識と併存していることを指摘する（山根 2008: 87）。つまり、母親となった女性たちにとって、私的領域における母親業と公的領域における自己実現という両方の重要性が増しているのである。

母親業の重要性が意識される日本社会では心理的な局面だけではなく、社会的な局面においても、母親に育児責任が集中している。アジアにおける6つの社会（中国・タイ・シンガポール・台湾・韓国・日本）を比較調査した研究によると、子どものケアをめぐる社会的ネットワークにおいて、日本はほかの5つの社会に比べて母親の役割が大きく、父親の育児参加や親族や他からの育児支援が少ない。なかでも、家事労働者がほとんど利用されていないという点は日本の育児をめぐる社会的ネットワークの大きな特徴といえる（落合・山根・宮坂編 2007: 286）。

近年、先進諸国においては少子高齢化や女性の雇用労働者化によってケアの担い手が不足しているだけでなく、国の予算の削減にともなう公的サービスの低下によって、私的領域・公的領域の両方において「ケアの不足」が生じている（Hochschild [1995] 2003: 214）。

それを補うために、第三世界の女性たちが労働力として先進国に輸入されている。アジアでも、台湾、シンガポール、香港といった経済発展を遂げた新興国では、欧米の先進諸国と同じく、ケアの担い手が不足しており、それを補うために、フィリピン、ベトナム、インドネシアといった周辺の第三世界各国から、多くの女性が家事労働者として渡航している（Constanble 2007, Lan 2006, 上野 2011）。また、このようにグローバルな市場に家事労働者を送り出す<送り出し国>においては、他国に家事労働者を送り出しているだけでなく、自国内でもたくさんの家事労働者が雇用されている。つまり、家事労働者という存在は日本と違って身近なものなのである。

海外で駐在している日本人は、その国の事情に合わせて家事労働者を雇う経験をする。近代家族の形成とともに、私的領域への他者の侵入に対する警戒と乳幼児期の母親業の重要性を内面化してきた日本人は、どのようなまなざしで家事労働者の存在を見つめるのだろうか。西（2004）は、香港在住の日本人駐在員の家庭を対象に、主婦にインタビュー調査をおこない、家事育児に関する主婦の意識と家事労働者の雇用の関連について分析している。西によると、家事労働者の雇用によって家事が二極化し、料理・育児については主婦のコアワークとして認識され、残りは家事労働者に委託される。とくに育児については以前にも増してエネルギーと時間を注がれ、きめ細やかに行われることが明らかになった。筆者も、2008年度にも京都大学GCOEプログラムの次世代ユニット研究のひとつとして、フィリピン国の首都メトロマニラのマカティ市とその周辺地域に居住する日本人駐在主婦を対象に、彼女たちの家事労働者の雇用経験についてインタビュー調査を実施した。調査を通してわかったことは、ひとつには、掃除・アイロンかけ等といった標準化されやすい家事に比べて、料理や子どもの世話は、主婦の個別のニーズが異なるうえに、家事労働者の経験・能力によっては委託しにくいものとして認識されていた。また、「「愛情表現」としての家事労働」（山田 1994: 154）という近代家族における家事への情緒的意味づけは、家事労働者への家事委託によって解体されやすい。それに代わって、主婦が家事から解放されること自体によって精神的・体力的な余裕が生まれることや家事をしなくて済む時間を余暇活動にあてることで主婦自身がリフレッシュして情緒的に安定し、その結果主婦は他の家族成員に対して愛情をもって応じるという「感情ワーク」（山田 1994: 62）が円滑にできるとし、それが情緒的側面での家族に対する貢献として当事者には主観的に重視されていることが明らかになった（山本 2010）。

筆者の2010年度の調査では、家事労働者によって委託されにくいという子どもの世話を特に注目した。日本ではいまなお三歳児神話という規範は根強く大きな影響力をもつが、一方調査地域であるフィリピンでは、現地語で「ヤヤ」と呼ばれるベビーシッターを住み込みで雇うことも珍しくない。とくに、幼少の子どもがいる中上層の家族では、母親ではなくヤヤが子どもと寝起きをともにし、子どもに関するあらゆる世話をすることさえある。

このように子どもの世話をヤヤにまかせることも一般的にフィリピンにおいて、日本人主婦の育児実践および母親としてのアイデンティティとフィリピン人家事労働者の雇用が

どのように関連するのかを、本研究で詳細に検討する。育児に関連した家事労働者へのまなざしを比較するために、就学前の子どものいる事例と子どものいない事例を比較しながら考察を進めていく。なお、フィリピンの日本人駐在員のあいだでは家事労働者を指す用語として「メイド」が一般的に用いられているため、以後本研究ではメイドという用語を用いる。

3. 調査方法

3-1. 調査の概要

本研究における調査方法を説明する。インフォーマントの収集方法として、インフォーマントから次のインフォーマントを紹介してもらうというスノーボール・サンプリングを採用した。実際の面接においては簡単なインタビューガイドを用意したうえで、インフォーマントには質問に答えていただきつつ自由に語っていただくという、半構造化されたインタビューを実施した。調査時期は、2010年6月～2010年12月である。ただし、考察にあたっては、2009年12月に本年度の次世代ユニット研究とは別にインタビューをした事例（Hさん）も加えた。

調査地域は、フィリピン国メトロマニラ首都圏のマカティ市のS地区・L地区・R地区およびマカティ市に隣接するタギッグ市G地区であり、調査対象はそれらのいずれかの地区に居住する駐在日本人主婦である。インフォーマントは合計25人となった。

ここで調査地域について簡単に説明すると、マカティ市は、フィリピンの首都であるメトロマニラのなかでも、外資系企業や銀行が集中し、高層ビルが立ち並び、多くのフィリピン人富裕層や外国人が住んでいる。2011年1月の在マニラ日本大使館の発表によると、2010年10月1日時点では、在留日本人全体の約56%（10227人）がマニラ首都圏に住んでおり、なかでもマカティ市が一番多く、在留日本人全体の約24%（4362人）にのぼる。とりわけ、マカティ市の中心であるS地区・L地区・R地区には在留日本人全体の約16%（2978人）が居住し、S地区にはマニラ日本人会の事務所も設置されている。なお、タギッグ市北東部に位置するG地区はマカティ市の中心部と隣接していることもあり、現在開発がたいへん著しい地域となっており、コンドミニアムの建設が次々に進められている。日本人学校をはじめ、インターナショナルスクールなど子どもの教育施設も多いため、G地区における日本人の居住者は急増している。2010年10月1日の時点では、G地区に居住する日本人は前年に比べて1.4倍に増加し、600人となった。

なお、本研究のインフォーマント全員が写真1や写真2にあるようなコンドミニウムに居住している。多くのコンドミニアムのユニットにはメイド部屋（写真3）があり、雇用主用とは別に、メイド用トイレ・シャワーが備えつけられている。以上のように、本研究の調査は、フィリピンのなかでもとくに多数の日本人駐在員が居住しており、住環境の点でもメイド雇用が前提とされているような地域において実施された。

写真1 L地区の高層コンドミニアム群



写真2 G地区にある広大なコンドミニアムSの中庭。



写真3 R地区にあるコンドミニアムのメイド部屋



3-2. インフォーマントの概要

本研究は調査にあたってスノーボール・サンプリングを採用したため、インフォーマントの属性にはさまざまな点で偏りが見られる。まず、年齢については、20代後半から30代である。子どもの有無については、子どもなしが7事例、子どもありが18事例であった。子どもがいる事例のすべてが、就学前の子どもを抱えた子育て期の女性である。表1にインフォーマントの属性を示す。

なお、本研究では、2008年度の調査では得られなかった、有職の日本人主婦におけるメイド雇用まつわる経験についてもデータを収集するべく、さまざまなルートから捜したが、結果として1事例を収集したにとどまった。

在マニラ日本大使館の発表によると、2010年10月1日の時点では、在留日本人女性は在留日本人の約30% (5433人) にすぎず、そのうち長期滞在者の女性は3968人 (学生を含む) で、その約69% (2733人) が同居家族としてフィリピンに滞在している (子ども含む)。つまり、在留邦人全体に占める女性の割合自体が低く、その大半が同居家族としてマニラに居住していることから、有職女性の数そのものが少ない。さらに、2010年11月にマニラ日本人会に問い合わせをしたところ、日本人会が把握している限りでは、既婚の日本人女性がメイドを雇用しながら子育てと就労を両立させている事例は、夫が非日本人で本人も永住者であることが多いこと、そもそも女性の長期滞在者のうち、既婚かつ有職でさらに子育てもしているというケースはビザの関係もあって難しく、非常に稀であること、フィリピンに同居家族として来た日本人専業主婦が、日本人会に登録した後、就労したかどうかまでは把握していない、という回答を得た。

以上から、おそらく、フィリピンで長期滞在者として滞在する日本人女性のうち、本人が就労し、かつ未就学児を育てる事例は少数であると推測する。また、夫の転勤・異動に伴ってフィリピンにやってきた日本人主婦がフィリピンで就労することには困難も伴う。ひとつには、駐在員の妻が労働ビザを取得するのは容易ではないということがある。もうひとつの理由は、夫の会社が、同伴する配偶者に対して配偶者手当を支給するかわりに、フィリピンにおけるその配偶者の就労を許可しないということが多いからである。つまり、フィリピンではメイドが雇用できる社会環境ではあるものの、日本人主婦の多くはいわゆる専業主婦として生活している。

メイド経験に目を向けると、2事例においてメイドを雇っていない。Aさんは子どもなしの事例、Hさんは子どもありの事例である。また、これまで、6事例はメイドの希望による退職やトラブル等を理由とした解雇により、メイドを途中で変わった経験を持つ。一方、15事例においては、最初に雇ったメイドを変わずに雇い続けていた。現在のメイドの雇用形態については、Xさんが住み込みと通いの2人のメイドを雇っていた以外は、22事例において一人のメイドを通い・住み込みのどちらかの雇用であった。通いの場合には、朝から夜まで、午前のみ、午後のみといった時間帯だけでなく、日数についても週1回から週5回というように幅があった。

表1 インフォーマントの属性

名前	年齢	在比 年数	子ども 人数	末子 年齢	メイド 雇用歴	現メイド 雇用形態	現メイド 雇用年数	備考
A	30代	1年	0人	-	なし	なし	-	
B	30代	1年	0人	-	1人目	通い（週1日）	1年	
C	30代	1年	0人	-	1人目	通い（週2日）	1年	
D	20代	5年	0人	-	1人目	通い（週2日）	1年	
E	30代	2年	0人	-	1人目	通い（週3日）	1年未満	
F	30代	7年	0人	-	1人目	住み込み	7年	
G	20代	1年未満	0人	-	1人目	住み込み	1年未満	
H	30代	1年	1人	3歳	なし*1	なし*1	-	
I	30代	1年	1人	1歳	1人目	通い（週2日）	1年	
J	30代	1年	1人	4歳	1人目	通い（週3日）	1年	
K	30代	1年	1人	2歳	1人目	通い（週4日）	1年未満	
L	30代	1年未満	1人	1歳	2人目	通い（平日）	1年未満	
M	30代	3年	2人	0歳	3人目	通い（平日）	1年未満	
N	20代	1年未満	1人	1歳	1人目	通い（週5日）	1年未満	
O	30代	2年	3人	0歳	1人目	住み込み	2年	
P	30代	1年未満	2人	0歳	5人目	住み込み	1年未満	
Q	30代	1年	2人	3歳	2人目	住み込み	1年未満	
R	30代	2年	1人	3歳	4人目	住み込み	1年未満	
S	30代	2年	2人	1歳	1人目	住み込み*2	2年	
T	30代	1年未満	1人	3歳	1人目	住み込み	1年未満	
U	30代	4年	2人	3歳	2人目	住み込み	1年未満	
V	30代	1年	1人	3歳	1人目	住み込み*3	1年	
W	30代	1年	2人	1歳	4人目	住み込み	1年未満	
X	30代	1年	4人	0歳	3人目*4	住み込み／通い	1年／1年未満	
Y	30代	2年	1人	4歳	1人目	通い（平日）	1年未満	有職

*1 インフォーマント本人の帰任によって単身赴任になる夫が週1で雇うことにしたメイドが、インフォーマントの帰国直前に一度来たことがある。

*2 インフォーマント本人が雇っているのは一人だが、インタビュー時点ではメイドの妹が諸事情によりメイド部屋で一時的に同居していた。

*3 インタビュー直前にメイドが妊娠のために急に辞めてしまい、インタビュー時点では次のメイドを探していた。

*4 前任地でも、メイドを雇用した経験があるが、ここではフィリピンで雇用したことがある人数を記載した。

4. メイド雇用にもなう母親業の再生産

本研究では、メイド雇用が母親の育児へのとりくみ（母親業）にどのような影響を与えているのかを考察する。まずは4-1項で日本人駐在主婦のメイド雇用の社会的背景を紹介したのち、4-2項で子どものいない日本人主婦のメイド雇用の特徴を述べる。4-3項では子どものいる主婦の場合のメイド雇用の様子を紹介する。最後に4-4項では、子どものいる主婦における母親業とメイド雇用の関連について、子どものいない主婦の経験との比較を通じて考察する。

4-1. 駐在日本人主婦がメイドを雇う社会的背景

日本では、高度経済成長期にかけて近代家族が大衆化した（落合 1997:108）。その背景には、戦後の女性の雇用機会拡大と都市と農村の生活格差が小さくなったことをうけて、（とくに住み込みの）家事使用人のなり手は激減し、通勤の家政婦を雇うことができる一握りの家庭をのぞいて、一般家庭から家事使用人という非血縁の他人は姿を消した（清水 2004: 213-220）。それから約半世紀、洋服のクリーニングや惣菜の購入、生協や通販などの宅配サービスの利用という家事の外部化は存在するが、私的領域内部での総合的な家事代行サービスの利用には抵抗があるとされる。1997年9月に実施された第28回国民生活動向調査によると、業者や家政婦さんに日常的な家事をやってもらうことに抵抗を感じる人は「非常に抵抗を感じる」33.5%「多少抵抗を感じる」47.4%と、抵抗を感じる人を合計すると8割にもものぼる（国民生活センター 1998）。

しかし、海外駐在先の日本人のあいだでメイド雇用が一般的であると、専業主婦であっても家事を委託することに心理的抵抗は少ないようである。また、本人は現地にてメイドを雇うつもりがなくても、前任者からの依頼でしぶしぶメイドを引き継いだり、現地の雇用策に貢献することだからという理由で会社から積極的に奨励されたりということもある。さらに、日本の生活よりも不便な点を補う面や、駐在日本人社会がメイド雇用に前提に構成されている側面があるということもメイド雇用の社会的な背景のひとつである。これらの点については、山本（2010）に詳述している。

なによりも日本に比べて、フィリピンにおける人件費が格安である点はメイド雇用を促進する理由のひとつである。駐在日本人家庭でのメイドの給料の相場は、住み込みの場合でおよそ月6000～9000ペソ（食費込み）と言われており、メイドの給料は、日本人宅で雇用された経験が長いのか、日本食を作ることができるか、子どもの世話が得意か、などが考慮されつつ、面接における交渉によって決まる。R地区・G地区は、S地区・L地区に比べてコンドミニアムの家賃が比較的高く、駐在員の生活水準もやや高い傾向があるせいか、メイドの能力・経験にかかわらず、全体としてメイドの給料も高い。ただ、メトロマニラでのフィリピン人家庭の住み込みメイドの相場は食事別とはいえ3000ペソ程度である。また、フィリピンの2010年の失業率が7.3%であり、銀行の窓口といった大卒一般職初任給でさえ8000～9000ペソ程度といわれている状況では、学歴が重視されないメイドにとって日本人

駐在員の家庭がメイドに支払う給料は安くはない。それでも日本人雇用主にとっては、日本で家事サービスを利用する¹ことを考えると、フィリピンでメイドに支払う金額は格安の部類に入るだろう。

他方、駐在員の妻という立場は、多くの場合、夫の会社や入国ビザの問題などさまざまな制約を受け、専業主婦（専業主母）でいるしかない。インタビューでは、子どもの有無にかかわらず、メイドにあらゆる家事・子どもの世話を任せてしまうと「ほかにやることがない」「自分はいったいここで何をしているのかわからなくなる」といった不安の声を多く耳にした。そのために、家事を取捨選択し、何をどこまでメイドに委託し、何をどこまで自分でやるのかという線引きによって自らのアイデンティティを維持することになる。以上をふまえたうえで、4-2項および4-3項では、具体的な事例から、子どもの有無によって主婦のメイド雇用に対する認識の違いを紹介する。

4-2. 子どものいない主婦とメイド雇用

世帯に乳幼児がいるかいないか、ということは、その世帯の家事量・家事労働時間と大きく関連する。最初に引用したように、平成18年社会生活基本調査によれば、末子が就学前の妻の家事関一日に7時間16分であり、末子の年齢階級が低いほど育児にかかる時間は長い。一方、子どものいない妻の家事関連時間は4時間17分である（総務省統計局 2007）。つまり、子どもがいない世帯では、就学前の子どものいる世帯に比べて家事にかかる時間は少ない。とくに子どものいない専業主婦の場合、家事を委託する必然性は低い。

◎メイドを雇う必要性の欠如

実際に、Aさんは子どもがいないため、現在の二人暮らしにおいてメイドを雇う必要性を感じていない。そのため、メイドを雇っていない。夫が会社で働いているのに対し、家事をすることは「自分の仕事」という認識があり、家事をしないことに罪悪感をもつという。

A: 夫が働いているのに、わたしが家事をしないなんて、ギルティを感じちゃうの
で。働いているんだから、わたしも家事で働かなきゃ、働くべきだと思います
よね。

Aさんは家事が好きなのわけではない。アイロンをかけなければならないシャツがたまったときには、メイドを雇いたいと思うこともあるが、「結局自分のスケジュール次第なので」とあくまで家事は自分の仕事と考えている。しかし、子どもができれば、現実問題として人手が必要になるのでメイドを雇うつもりだと語る。

¹ 日本で家事サービス代行を委託する場合、地域にもよるが1人1時間3000円前後が相場である（『朝日新聞』2007.10.20 夕刊 be）。

A: いつかわたしももしかしたら雇うかも、っていうのはありますね。いまはまだ踏ん張れているから、いつかって思ってた。子どもができたりすると、わたしもじきに雇うのかしらって。

また、Aさんは、駐在主婦同士の独特なつきあいはメイドを雇用する理由にならないと考えている。

A: 結局、趣味の世界で生きてるじゃないですか、駐在妻っていったら。お茶とか行ったり。それってやっぱり贅沢な話だから。それを優先してまで家事を怠るといふか、家事をしないっていうことは考えられないんですよね。

しかし、駐在の主婦たちをとりまく独特の社交文化は、実際に主婦たちを忙しくさせている。夫の会社によっては、妻たちで集まるというミセス会や婦人会と呼ばれる会合が定期的に催される。ミセス会・婦人会のなかには、その出席を義務に近い形で要請するものもある。主婦たちが積極的にそのような会合に出席したり、日本人が多く集まるような習い事へ参加したり、あるいは個人的にいろいろな日本人と交流をはかるといふのは、単に主婦の孤立を解消するというだけでなく、外国生活における貴重な生活情報を得るためのネットワークを構築するという駐在主婦にとっての重要な活動でもある。Aさんは英語が堪能で、海外留学経験もあるため、フィリピンにおいて生活に困るようなことはとくにないというが、とりわけ言語が得意ではない場合は、日本人向けの生活情報メディアが限定されることもあり、海外生活を円滑に進めるために日本人社会における口コミ生活情報は重要である。そういった情報を得るために社交に力を入れざるをえない。このように、駐在主婦の社交活動は、単なる娯楽というだけでは片付けられない側面をもつ。

Aさんを含め、インフォーマントのほとんどは夫の会社の妻たちによる会合に定期的に参加し、習い事（英語、お菓子教室、茶道、ヨガ、等）やサークル活動を楽しみながら、積極的にネットワーキングを行っており、専業主婦といっても何らかの社会的活動に参加している。

◎主婦の仕事としての家事

社交や習い事の機会が多い駐在主婦であっても、子どもがおらず、仕事もしていない主婦にとって、二人暮らしの家事量は多くはない。そのため、子どもはいないがメイドを雇っている事例では、最初から積極的にメイドを雇用した人はいなかった。Bさん、Fさん、Gさんは本人の希望に関係なく彼女たちがフィリピンに赴任したときにはメイドがすでに雇われていたし、Cさん、Dさん、Eさんは、赴任してしばらくはメイドを雇わずに生活していた。Cさんは怪我によって一時的に掃除が思うようにできなくなったことでしぶしぶ雇う

ことになり、Dさん、Eさんは親しい知人から帰国の際にメイドをゆずりうけたことをきっかけに雇いはじめた。

たとえば、Cさんの場合、彼女の骨折によって、一時的に掃除が「一苦勞」と感じるようになり、メイドを雇うことに決めた。怪我が回復したあとも、掃除だけ継続して頼んでいる。もともとは、まったくメイドを雇うつもりはなかった。

C: 英語学校には通おうと思ってたんですけど、でもそれ以外に特にこれとってやるのがなかったので、メイドさんまで雇ってしまったら、本当に自分がやるのがなくなってしまう。毎日やるのがなくなってしまうというので、それだったら雇わずに、家のことは自分でやろうと思って。時間つぶしじゃないけど。

Dさんの場合には、最初の3年以上、自分で家事をしていたが、親しくしていた知人が帰任になり、メイドの次の雇い主が決まらずに困っていると知り、メイドを引き継ぐことにした。

D: 丸3年間、お手伝いさんのいない状態で自分でやってきていて、特に困る、絶対にお手伝いさんが必要という状況ではなかったの。ただ居てくれたら便利かもね、ぐらいの感覚で。

子どもがいない専業主婦にとって、たとえ駐在生活において社交や習い事で忙しいとしても、家事はメイドを雇わなくても自分でできるものという自負がある。そのため、メイドの雇用形態も住み込みではなく、短時間の通いが好まれ（赴任前から住み込みのメイドが雇われていたFさん、Gさんにおいても、もし今後自分でメイドを雇う機会があれば通いがよいと考えていた）、掃除・アイロン・洗濯など限定的な一部の家事の委託を望んでいる。そして、あくまで作業の委託であるため、作業が終了していれば就業時間内でも終了してもよいと考える人が多い。

◎選択的な家事の委託と主婦アイデンティティの維持

インフォーマントのうち、子どものいない専業主婦の場合には、メイド雇用とはプロフェッショナルに特定の家事サービスを委託することとしてとらえられている。つまり、メイドによる家事の仕上がり具合は、主婦が自分で家事をするよりも上手であることは重要である。

Bさんは、夫が単身赴任中に雇っていたメイドを「最初はいらないかなと思ったけれど」「(途上国でメイドを雇うのは)義務だと思って」、日本からBさんがきてからも継続して雇っている。メイドは「スーパーウーマン」で、その仕事ぶりを高く評価している。調査

時点では、夫が単身赴任中に頼んでいたのと同じ、掃除・洗濯・食器洗い・アイロンかけを頼んでいた。

B: 掃除ぐらいだったら自分で（日本の）家でも毎日やってるから、（メイドさんが）やらなくてもいいって話を（夫と）してたんだけど、実際やってもらうととてもきれいだし。（中略）気になるところを言おうと思ったんだけど、全くなかった。初めて来たときに、終わったのを見て、帰ってきて「It's beautiful!」って私は言ってしまいました。

Eさんの場合、「わざわざ人に頼むほどの掃除とか洗濯とかの仕事量ではなかった」ということもあり、赴任してしばらくはメイドを雇っていなかった。調査時点では、帰任することになった仲の良い友人から仕事ができるメイドを紹介され、苦手な掃除を中心をお願いしていた。

E: お掃除がほんとに好きじゃないっていうのもあるし、やるとものすごい時間がかかってしまうんです。やりはじめるとどうでもいいところに目がいつちゃって、全部ひっくり返すみたいになっちゃって、収集つかなくなってしまうんですけど。その点はメイドさんはプロだっていうか、すごく速いし、きれいにびしっとしてくれるので。

自分で家事ができないわけでもなく、時間がないわけでもない。そのような主婦がメイドを雇用するとき、彼女たちがメイドに期待することはあくまでもプロフェッショナルリズムである。きれいに片付いた部屋。びしっとあてられたアイロン。とくにメイドを雇わなければならない必要性はないけれども、雇うことで生活水準を向上させられることに彼女たちはたいへん満足している様子がうかがえた。

◎メイドに委託しない家事

しかし、その一方でメイドにあえて委託しない家事もある。インフォーマントのうち、子どものいない専業主婦の多くの場合、それは料理である。子どもがいないインフォーマントが専業主婦になったきっかけは、全員が結婚にともなうフィリピンへの転居であった。子どものいない状況ですべての家事をメイドに委託して自分が家事をまったくしないということに戸惑いを感じるという声が多く、Gさん以外は主婦自ら夕食を作っていた。

Dさんの夫は、メイドに家事をまかせてDさん自身ももっと好きなことをすればいいというが、Dさんはメイドに家事を丸投げするつもりはない。メイドには「掃除、アイロン、お料理の下ごしらえ以外は何もさせていない」という。それは「自分で気持ちよく生活するために、自分で家事をする」というDさんの語りにもあるように、料理の味付けや整理整頓

などの家事の一部を自分ですることは彼女のライフスタイルにおけるこだわりである。一方で、夫との関係において、自分が収入をとまなう仕事をしていないために、家事をメイドにすべて任せると家族に対する自分の貢献が不足するかもしれないという不安を感じることに言及する。

D：特に今、仕事してないですし。（中略）。無意識に自分のこと認めて、褒めてほしいじゃないですけど、しっかり自分の与えられた役割をこなすことで、あたしもちゃんとやってるわよ、的な。

しかし、子どもができれば話は別である。いまは面倒なので自分のこだわりの家事のやり方や料理についてメイドに教えていないが、もし妊娠すればすぐにもメイドにそれらを教えて家事を任せ、自分は妊娠・育児に集中したいという。

D：もし子どもができたら、妊娠中は自分のこと。自分を一番大事にしたいし、子どもが生まれたら子どもとの時間を取りないな。そのときにお手伝いさんが全部やってくれたら、それはすっごいすばらしいことだなと思います。

Eさんも、Dさんと同じく料理は自分で必ずやっている。料理は他の家事のように標準化されないことを理由とする。

E：（料理をメイドに頼まない理由は）たとえば、洗濯とか掃除は、わたしがやるより彼女がやった方が格段に仕上がりがいいんですけれど、料理に関しては、わたしがやったほうが仕上がりがいいというか、うち好みの仕上がりになるからだと思います。

Fさんのメイドは、一般的な日本食を作ることができる。朝食は毎朝、「パンとコーヒーと卵料理と果物」と決まっており、メイドが用意する。一方、夕食については簡単なものや下ごしらえを頼むことはあるが、味付けは自分でする。Fさんによると朝食はともかく、夕食をメイドにすべて委託することには心理的に抵抗があるという。

F：こちらに来たばかりのときに、生活が日本とはまったく変わるわけですね。私自身も、結婚生活をするのはじめてだったので、こちらが。来たはいいけど、会社辞めて、仕事辞めてきたんですけど、別にやることもない。お手伝いさんがいて全部やってくれて。それで、最初はやることなく、ほんとどうしようってみたいな感じだったから。そういうのはありますよね、やっぱり夜ご飯くらいは作ろうかな、みたいなの。

子どものいない主婦が、一方でメイドには掃除やアイロンかけを中心にプロフェッショナルな家事サービスを求め、他方で自分自身のこだわりを反映させられるような一部の家事を自ら担うことによって、自分の目の行き届いた、より快適な生活を実現させようとする。つまり、子どものいない状況では、メイドに委託する家事と自ら行う家事を区分することで、主婦のアイデンティティを維持する傾向にある。

◎家事からの解放と感情マネージへの集中

子どものいない日本人主婦の事例のなかには、本人の希望にかかわらず、実際の生活において一切の家事をメイドに任せているというインフォーマントもいた。Gさんは、在比1年未満。もともとメイドは「経験として雇いたい」と思っていたものの、「二人やし、やることがないから」と通い週数回を希望していたが、夫の前任者から住み込みのメイドを引きつぐことになった。Gさんは料理をするのが好きなので赴任当初は自分で料理をしていたが、それによってメイドの機嫌が悪くなってしまったことに気がついた。そこで、メイドに料理も任せるようにしたところ、メイドの機嫌が良くなったため、そのまま料理も任せるようになった。現在、「まったく家事をしていない」ので、現在自分が「主婦」であるという感覚はなく、夫との関係も「結婚というより同居人」と語る。Gさん自身はメイドに対して無関心で、メイドの年齢もメイドが家事をしている以外にどんな時間の過ごし方をしているのか、ごはんをいつ食べているのかなどもほとんど知らない。夫は仕事が忙しく、「主人に迷惑をかけないようにするっていうことで精一杯」と語り、メイドが家にいる平日は、ほとんど外出して自分で自分の時間を楽しんで過ごしている。

G:一年来て…たっちはいるんですけど、まだまだ余裕がないというか、お互い。

主人も仕事で精一杯ですし。わたしも主人に迷惑をかけないようにするっていうことで精一杯なんです。そのへんに余裕がまだないですね、お互いを気遣うというか。

筆者：ご主人に迷惑をかけないようにすることで精一杯っていうのは、自分のせいでご主人が仕事を休まなくちゃいけないとかにならないようになっていう？

G：そうですね。

筆者：「早く帰ってきて」って言わないとか？

G：そうそうそうそう、そうですね。

筆者：ご主人はけっこう、帰ってくるのが遅いんですか。

G：遅いですね。日本人が一人なんですよ、会社で。出張者もよく日本から来るんです。出張者が来るとフルアテンドで、その間全部ご飯いらなかったりとか。今月ももう、半分くらいはいないですね。

筆者：ご主人も忙しくて、家事はお願いしていて、いつもはどういうことをされてるんですか。すみません。どういうふうに？

G: そうですね、それもよく聞かれるんですけど。(語学の) 学校いってるあいだは学校でばたばたしていますし、あとは遊んでますよね。一人でどっかに行ったりするのは、別に苦じゃないんで。「車さえあれば何とでもする」って旦那には言ってるんで。車と運転手だけは用意してくれ、あとは自分で好き勝手に時間をつぶすって。

Gさんの事例では、子どもがいないにもかかわらず住み込みメイドにすべての家事を委託している結果、Gさん自身は自分が主婦であると考えていない。しかし、家事をしなくてもよい分、語学学習や趣味等を充実させ自分が異国の地においてもいきいきと過ごすことに積極的に努めており、夫に迷惑かけないことが自分の役目という認識をもっていた。再生産活動を他人に完全に委託して、不慣れな海外生活を過ごしながらかは感情マネージに集中しているのである。

◎子どものいない主婦のメイド雇用の特徴

少ない事例ではあるが、子どものいない主婦にとってのメイド雇用の特徴を考察する。子どものいない主婦にとっては、メイドの雇用は社交や習い事で忙しい駐在生活を支えるとはいえ、決して必要性が高いわけではない。基本的に、料理など自らが家事をする余地を残して、家事の委託は一部にとどまる傾向がある。また、メイドの仕事内容に対する期待は高く、メイドは家事のプロフェッショナルであることが重要である。

4-3. 子育て期の母親とメイド雇用

では、就学前の子どもがいる子育て期の主婦はメイドの雇用についてどのように認識しているのだろうか。本項では、子どもがいるインフォーマントから共通に語られた、メイド雇用がもたらす子育てへの影響に関する典型的と思われる事例のいくつかと、子育てへの影響を考慮してメイドの雇用を回避した事例、メイドの雇用によって母親が就業した事例を順に紹介する。

◎母親の手の延長となる都合のいいおばあちゃん

日本は1980年代半ばから「子どもの欲求に対して常に反応のよい親でありつづける」(品田 2004: 138) という至難の業が子育てにおいて求められるようになった。しかし、核家族世帯において、とくに子どもの数が多い場合に、母親一人では手が回らないこともある。そこで、メイドが母親の手の延長として活躍することがある。Oさんは3人のお子さんがいる。

O: 今の時点ではちょっといいのか悪いのかは分からないけど、ちょっと…子どもがうちは3人なので、必ずしも1対1で…どうしても3分の1ずつになってしまうの

で(ママ)、特に真ん中の子はちょっと今いやいやを言うときで、ちょっとかんしゃくを起こしたりするんだけど、もう私ではもなくメイドさんのところに逃げ込むというか、ひとつの逃げ場みたいな感じで、胸に飛び込んでいくってことはあって。それでちょっと泣いてたのが泣きやんだりとかあるんで、それは母親としてどうなのかなと思うこともあるんだけど、どうしてもやっぱり一人だと、もし日本でそういう人がいない場合は、第三者がいなかったら泣かしっぱなしにしとくか、ほかの子を置いてその子だけ抱くのか、ちょっと分からないけれど。そういうことに関しては抵抗はあまり今はないですね。自分の代わりにお手伝いさんがなだめてあやして、子どもが落ち着いてくれるとか。

0さんは、メイドの存在を「都合のいいおばあちゃん」と説明する。気軽に家事を頼むことができ、子どもたちにはいつも優しい。核家族に第三者の大人が存在することも子どもにとってもいい環境であるという。0さんはメイドの信頼できる人柄と子どもへの優しい態度を高く評価している。0さんはメイドに高い家事能力を期待していない。実際、0さんの家のメイドは料理はできないし、掃除などに秀でているわけでもないという。しかし、0さんはメイドに対して駐在日本人家庭のなかでも比較的高い給料を支払っている。それはメイドの家事能力に対してではなく、メイドの性格と雇用主との相性に対して支払われている。子どものいる主婦にとって、メイドはプロフェッショナルな家事サービスの提供者というよりも、自分の手の延長としての活躍が期待される。メイドと家で過ごす時間が長いこともあり、ひとつひとつの家事の仕上がり以上に、メイドの人格や信頼性、自身や子どもに対する接し方や臨機応変に対応できるかといったことがメイドに求められる。

◎自分が優しい母親になるために

Mさんは、主婦の役割は家事育児という意識が強く、メイドにまつわるトラブルの噂をよく耳にしていたこともあって、メイドの雇用についての当初の認識は、「特別なことっていうか、贅沢なこと」であり「あまりいいイメージはなくて。自分が楽するためだとか。わたしには関係のないこと」というものであった。しかし、第二子の妊娠にともなう悪阻のひどさと親戚による育児援助が期待できない海外生活という環境から、しぶしぶメイドを雇うことにしたところ、生活が一変したという。

M: いまは、180度変わって(笑)。もっと早く雇えばよかったっていう感じで。もし、もっと早く雇っていたら、やっぱり自分にも時間ができるし、心にもゆとりができて、もっと違う楽しみがあったのかなとも思いますね。

Mさんはメイドを雇うようになってからは、メイドの雇用に肯定的である。その理由は、

メイドに家事を委託することによって、自分が優しい母親になることができるからである。

M: 何が一番って、心にゆとりができる。子どもがいると汚したり散らかしたりするから、それを目にしてムカムカするっていうのがなくなった。こぼしても優しく叱れる。子どもに対して、ずいぶん変わったような気がする。自分自身が。(日本に一時帰国していたときに比べると現在は) すごい優しい。気長に接してあげることができるというか、前は待つてあげることができなかつたんだけど、やっぱりこっちにいると待つてあげられる。子どもの話も聞いてあげられるし。

近代家族の誕生にともない、子どもが母親の愛情と献身を受け、家族の中心において配慮されるようになった状況が出現した。それは「子ども中心主義」と呼ばれる(落合 1989:81)。幼少の子どもがいる事例におけるメイド雇用では、まさにその「子ども中心主義」を強化した育児法が実践される。より優しく、感情的に安定した母親になること、子ども中心の生活といった母親業をさらに積極的に充実させていく。

一方、Mさんはメイドを子育てに関わらせることについての不安ものぞかせる。調査時点では、Mさんは2歳の長男の世話と料理を自分の役割としており、生まれて数ヶ月の次男の世話と家事をメイドに委託していた。

M: いい面をいえば、子どもと一緒に関わってあげられたり、優しく接してあげられたりだとか、子どものペースに合わせてあげられる。自分にゆとりがあるから。子どものペースに合わせてあげられるけれども、やっぱり、親の姿を見て子どもは育つと思うから、私が片付けないで、ほかのメイドさんが片付けているところを見てしまうと、それが子どもにとって、いい影響なのか悪い影響だろうか、ちょっと考えるところがありますね。特に、次男なんて、わたしと接している時間と、メイドさんに接してもらっている時間だと、彼女に見てもらっている時間の方が長いと思うから。誰がお母さんかわからないんじゃないかと。もし鳥だったら、次男は彼女の方をお母さんだと間違えると思う。

Mさんのように、メイドに家事を委託することがはたして子どものしつけにとってはどういう意味をもつのか、という不安の声は多くのインフォーマントから聞かれた。なかには、メイドへの家事委託を取捨選択することで、子どもへの影響を様々に統制しようとする人もいた。Rさんにとって、メイド雇用の長所は、なによりも母親が積極的に子どもにかかわる時間を確保できる点にあるという。Rさんは家事委託によって生まれた自分の自由な時間を「ほとんど子育てに費やしているつもり」と語る。

R：料理を「ちょっと待っててー」とか、「洗濯、今干してるからちょっと待ってて」って今まで日本で息子に言ってきた。(メイドを雇っている現在は) ちょっと待てるような時間がなくなるので、1日何冊も本と一緒に読んであげられたりとか、はい。あとは、少し泣かせても体力がつくからいいって日本では言われてたようなことがなくなって。泣かす時間がなくなったなというふうに思います。待たせる時間。

ただし、Rさんはおもちゃの片付けは子どもへのしつけという点で本人にさせると決めており、メイドにはまったくやらせない。また、料理ができるメイドを雇っているが、ふだんの夕食作りと幼稚園のお弁当作りは母親であるRさん自身がやることにしている。Rさんだけでなくすべてのインフォーマントにおいて、子どものお弁当を作る必要がある場合には自ら作っており、お弁当作りは家事ではなく、育児の一部として認識され、重要な母親業のひとつである。

R：(お弁当を) 詰めたとき、いつも「お弁当を見せて」って言われるんで、「今日はどういうふうに入れたよ。どう？」みたいな感じで言うと、「これはおいしそうだね」とかって、ちょっとしたふうにはなるので。

また、母親が子どもに積極的にかかわることは現在海外に住んでいるということも理由として大きい、とRさんは語る。というのも、フィリピンには子どもの祖父母や親戚はいない。「経験不足な子どもにならないように気をつけないと」と語るRさんは、母親が積極的に子どもといろいろな人をおかかわらせる機会を提供しなければ「(フィリピンでは子どもが) もまれずに育ってしまう気がします」という。

子どものいるインフォーマントは、Rさんのように親子連れで集まる機会を主体的にもつようにしていた。同年齢の子どもをもつ親が集まってプレイグループを組んだり、日本人会で行われている子育てサークルに参加したり、ボランティアによる絵本の読み聞かせの会に参加したりするなど、母親同士・子ども同士のネットワーキングが積極的に行われていた。また子どもにさまざまな習い事をさせていることも多い。その背景には、家事をメイドに委託しているからこそ、子どものつきそいや子どもの相手をする時間が容易にもてるという仕組みがある。メイドに家事を委託することで増えた自由時間を子育てに充てることで、質量ともにより充実した子育てを実現しようとする。

◎教育的配慮からのメイド雇用の回避

一方で、子どもへの影響からあえてメイドを雇わないという選択もある。多くの駐在日本人主婦が子育てのサポートとしてメイドを雇うなかで、Hさんは駐在期間中、メイドをあえて雇わなかった。夫が家事育児の分担に協力的だったこともあるが、本人も日本では仕

事を継続しており、育児休業を利用した短期の「専業主婦」期間であるという自覚を強く持っていたことが大きな理由のひとつである。また、Hさん家族は一カ所にコンドミニアムと商業施設が隣接してたいへん便利なおうえ、部外者が入れないというセキュリティも高いR地区に住んでいることもあり、日本との生活に比べて不便な点はなかったため、メイド雇用の必要性も感じなかった。Hさんはもともと休職期間中に「(子どもと) 離ればなれの時間を作る気は全然なかった」としながらも、子どもが1歳半のときに幼稚園に入れることにした。それは、Hさんが子どもを預けたかったからではなく、子どもにとって母親とべったりいるよりは、同年齢の子どもたちとの関わりを作る機会が子どもの成長にとってよいと考えたからである。

メイドを雇用しないもうひとつの理由は、子どもへの教育的配慮である。Hさんの母親は子どもが家にいる時間には必ず家にいられるように就労を調整していたため、Hさん自身は常に母親が家で家事をしているのを見て育った。母親が大根を切る音を聞きながら、台所で過ごす時間が好きだったという。そういう環境を自分の子どもにも提供してあげたいという思いがある。その中で、子どもはさまざまなことを学ぶという。

H: (自分の子どもの頃のような家庭環境を) ○○ (子どもの名前) にも作ってあげたいっていうのがね。まったく同じことができるとは思っていないから、母親とね。でも少しでも近づけるといえるか、自分でもできることはしたいっていうのはあるね。一回だけね、友達のうちだったか、わたしのうちだったか忘れちゃったんだけど、何かがこぼれちゃったときに。たいてい、お手ふきが置いてあるでしょ？それをばってとって、○○がふこうとしたのね。思わず、お手ふきだから、これで床をふいちゃだめよ、って止めたんだけど、お友達のママは、「すごいね、○○くん、ちゃんとお掃除しようとするんだね」っていうから、「なんでも親のしていることをマネするもんね」って。わたしは全然ふつうに言ったつもりだったのね。自分が雑巾がけするから、○○はそれを知っているっていうわけだから。でも、お友達のママは、「え、でもこれはしてないでしょ？」って言われて。床ふきはしてないでしょって普通に返ってきて。「え、でもうち、雑巾がけもするよ」って言ったら、どうもその感覚としては、メイドさんがモップでしているっていう、そういうニュアンスだったんだけど。その会話をしたときに、すごく思ったんだよね。親のそういう姿を○○が見ていてくれている、見せていてよかったなって思ったんですよね。そんなのは思う。そんな意味っていうか。自分がする姿を見せないといけないっていうのはあるね。

一方で、子どものいる日本人家庭ではメイドの雇用が一般的であるために、メイドのいる家のように子どもの友達を大勢呼ぶような余裕がなかったことについては残念に思っ

いる。

H: お友達のおうちに遊びにいかせてもらったときに、最近は夜ごはんをお呼ばれになったりするんだけど、うち以外はメイドさんがいるから、お風呂からみんなね、来ている子どもたち3人みんなやってくれて。ごはんもここで食べなさいってやってくれて。そんなのは、逆にメイドさんがいて、そういうことができると思うから。そういう時間を作ってあげれるっていうのは、子どもは喜ぶよねって思ったり。(中略) 3人4人来てもらってっていうのは、自分ちだと、ちょっとようやらんわって思うから。確かに、メイドさんがいてくれると、全部そうやってやってくれて。人手があるから、やってあげられることかなって思うから。そんな経験ができるのも、〇〇(子どもの名前)にとっていいかもねって、主人と話したことあるんだけど。主人には、「ああ、もう日本に帰れないね」って言われちゃって。

Hさんのように、子育て期にありながらメイドを意図的に雇わない家庭は日本人駐在員の家庭のなかでも少数派であるが、Hさんの選択にはメイド雇用が子どもや親子関係に与える影響が考慮されていることがわかる。なお、Hさんは育児休業後、仕事に復帰するために夫を残して先に子どもを連れて日本に帰ることになったが、その際夫は週1回の掃除洗濯のための通いのメイドを雇った。

◎母親の自己実現のためのメイド雇用

Yさんは、家族でマニラに赴任してから専業主婦/専業主母として、最初の1年半はメイドを雇わなかった。子どもが幼稚園に行くようになったが、親と子どもの関係に「介入」してもらうためにメイドを雇いはじめる。

Y: わたしと主人と本当にべったりで。本来、日本にいたら、親せきとかおじいちゃんとかおばあちゃんとか、ほかの大人が介入するけれども、そこがなかったから。わたしはどちらかというと家事をしてほしいっていうよりも、子どもと遊んでほしかったっていうか。ヤヤさんの部分がほしかった。

筆者: べったりっていうのは、何か問題を感じることであったんですか。

Y: やっぱりね、子どもって本来いろんな年齢の人とかいろんな人と接しながら育っていくのがわたしはいいと思うねんね。おばあちゃんとかおっちゃんとかおにいちゃんとか、近所の子とか。いろんな年代の人と、いろんな人と接しながら育っていくのが。日本にいたら、おばあちゃんにも会えるし、おねえちゃんにも会えるし。そういうのができると思うんだけど、できないじゃないですか。親せきっていうのがいないから。それ以外の大人となると、学校の先生、

友達のおかあさんとか。でもわたしはそれ以外にもほしかったんですよね。あの子自身が、すごい引っ込み思案な子やから。最初の、一番の理由はそれでしたね。

Yさんがメイドに求める能力は「家事は適当で」よく、子どもとの関係が良好に築けると、信頼できることを高く評価している。その後、子どもも4歳になって幼稚園に午後までいくようになり、メイドとの信頼関係も深まってきたころ、Yさん自身のキャリアについて考えるようになる。

Y：自分の先のことを考えたときに、何っていうんやろ、いまのこの生活。いわゆる駐在の奥さんの生活ってあるじゃないですか、それをしていてまったくいろいろ考えなくなっていくのがわかってんね。日本にいたら、やっぱりいろんなことを自分が決めて自分でできるじゃないですか。いろんな情報も集め。集めることはここでもできるけれど、それを集めることも決断することも自分でできるじゃないですか。でもここっていうのは、やっぱりある程度制限があるから。何かあったら、やっぱり（夫の）会社を通さなだめとか。何でも許可がある程度いるから、何でも勝手に動けへんっていうのがあるじゃないですか。基本的に日本では、わたしはばあっと自分で動いてやって、主人に相談して、最終的に「じゃあこうしようか」って。でもそれが、（夫の）会社がやっぱり間に入ってしまうから。そうしてると、やっぱりある程度制限されてくると、考えなくなるっていうか。それで、怖くなってきたんですよね。日本に帰ったら自分でまた、仕事もしたいと思ってたし。でもこのままいってしまったら、私何も無いわと思って。

そこでYさんはフィリピンで働くことを模索しはじめる。幸い、夫や夫の会社の社長の理解もあり、仕事を探した結果、午後12時から夕方6時までのパートタイマーとして2010年8月から旅行会社で得意の英語を活かした仕事をはじめた。Yさんのメイドは他の日本人家庭と掛け持ちをしており、Yさんの家では平日午後1時～夜7時までが勤務時間である。朝からYさんは朝食と家族3人分のお弁当を作る。朝、子どもを幼稚園に送るのはYさんの役目である。子どもの歯医者や病院に行く必要があるときは、午前中のうちにYさんが子どもを連れて行く。Yさんが出勤後、午後1時にメイドが到着し、掃除・洗濯・夕食の下ごしらえ等の家事をする。午後3時にYさんのドライバーが子どもを幼稚園に迎えにいき、子どもの帰宅後はメイドが子どもと一緒に過ごす。限られた親しい友人で事情を知っている人であれば、その家のメイドと子どもだけで夕方家に遊びに来てもらうこともある。夜、Yさんが職場から帰宅後、メイドの一日の仕事は終了となり、Yさんが夕食を完成させる。

メイドが「ほんまにええ人」「信頼できる人」であることを就労する前に確認できていた

からこそ仕事をする事ができた、とYさんは強調する。つまり、子どもを任せるには何よりも人柄や信頼性が重要であり、現在のメイドが辞めるようなことがあれば、自分が仕事を続けるために別のメイドを探してすぐに子どもを託すことは非常に難しいと感じている。また、もし自分が仕事をする事で子どもが情緒不安定になるようなことがあればすぐに辞めようとYさんは思っていた。いまでは、全面的に信頼しているメイドのおかげで、子どもが風邪をひいて幼稚園を休むことになっても、メイドとの二人三脚でYさんは仕事を休まずに済むという。

メイドのおかげで仕事を開始したYさんは、働く母親の視点から、日本の子どものケアに関する社会的ネットワークの貧困さを補うためにも、日本でもアジアの新興諸国のように家庭でメイドを雇う環境が整備されることを望んでいる。

Y: 日本で働くとなったら、とんでもない負担が出てくるもん。まず、保育園は待ちでしょ、それで私学にいれたりしたら、自分のもらっている給料のほとんどが保育園代に行ってしまう。やっぱり、熱が出たら実際に預かってくれないじゃないですか。誰かがフォローしなあかんと。そしたら、働くことにもものすごい制限がかかってきて、結局自分の親が近くに住んでるとか、親のヘルプがない限り。でもこのシステム（注：メイドの雇用）があれば、女性がもっと社会に。でもメリットとデメリットの両方は絶対あるから。それは、なんともいえへんけど。でも、そういうシステムになることによって、女性がもっと社会に出られるっていうのはあると思う。一番の、根本的なところやからね。（日本では）誰も子どもの面倒みてくれる人がおらへんねんもん。

以上、少数ではあるが紹介した事例からもわかるように、メイドの雇用（あるいは雇用の回避）は常に子どもへの影響との関連で意識されている。通常、日本において母親一人ではこのように徹底して子ども中心のペースで生活することはなかなか至難の業であるが、メイドが母親の補助的役割として活躍することで、子どもに対する「母親のフルタイムの愛情と献身」（落合 1989: 81）が当事者にとってより効果的に形で実践されている。他方、メイド雇用がもたらす子どもへの影響については教育的配慮の点から心配される。日本人駐在員家庭において子どものいる場合のメイド雇用は、子ども中心主義という近代家族の核となっている心性に照らされて評価されている。

4-4. 考察

紹介してきたように、乳幼児の子どもの有無によって、メイドに寄せる期待には違いがある。子どものいない主婦は、メイドは家事能力の高さで評価し、メイドによってもたらされる快適な生活に期待する。一方、乳幼児の子どもがいる主婦は、メイドを子どもとの関連で評価する。すなわち、家事能力の高さは二の次であり、子どもを任せきりにするこ

とはなくても、子どもと接する以上メイドには人柄の良さや信頼性を求める。母親は、母親業のコアになる部分を担いながら子ども中心主義にのっとった子育てを当事者が思うような形で実現するために、メイドには母親の補助的存在として母親の手の延長になることを期待する。メイドの存在によって、子ども中心主義的育児法を徹底し、母親一人では実現不可能な近代的な母親業をより理想に近い形で実践しようとするのである。

西は、香港の日本人駐在員家庭の主婦はメイドを雇用することによって、「家事の一部の情緒化をやめる一方で、育児をより重視する姿勢が明白になった」（西 2004: 119）と指摘する。その理由として、「駐在員の妻でつくるネットワークは密度が濃く、メンバーの生活を相互に日々観察、監視している。そして「育児にメイドがかかわりすぎるとしつけのない子になる」という家事規範が広く流布している」という社会的背景をあげる（西 2004: 117）。本研究のインフォーマントにおいても、母親があくまでも子育ての責任者としてメイドと子どもの関係を考えなければならない社会的状況が存在する。インフォーマントの住む居住区はコンドミニウムを一步出ると交通量が多い。また、治安面でも、日本に比べて強盗事件や身代金目的の誘拐事件が多く、子どもが犯罪にまきこまれるリスクが日本よりも高い。またメイドによっては、子どもにただテレビを見せ続けるだけであったり、子どもが欲しがらだけ甘い物をあげてしまったりということもある。このように、メイドに子どもを任せることができないと思うような状況を目撃することも多い。あるいはコンドミニウム内の公園に行くふりをして実際にはメイドの友人の家に子どもを勝手に連れて行かれた、というような実体験（Qさん）や、近所の公園でみかけるメイドが子どもを放置し、おしゃべりや携帯でのメールのやりとりに興じているあいだに子どもにけがをさせたことにさえも気づかなかったという出来事に遭遇する（Lさん）ことによって、メイドに子どもを任せられないという不信感をもつ人もいた。また、日本語で育てている子どもにはメイドの言語が理解できないという指摘もあった（Kさん、Tさん）。主婦とメイドの文化的背景が異なるということも、子どものしつけや世話に関する不安につながっている。

しかし、今回の調査で明らかになったのはそのような社会的要因だけではなく、母親自身が子ども中心的な近代的育児観を積極的に支持し、メイドの利用を自らのアイデンティティの維持と家庭の文化的理想の実現に結びつけているという点である。落合恵美子は、家事が市場の残余として成立しただけではなく、「家庭生活の期待水準が引き上げられるかたちで、家事が創出された」という点を述べるなかで、家庭料理の創造や衛生思想の普及によって洗濯や掃除の回数や水準が上昇したことについて言及している（落合 1997: 41-43）。また、大和礼子は、家事労働の文化的意味を検討するなかで、家事使用人の労働は、労働者階級の女性によって、「中産階級の身体を再生産したばかりでなく、中産階級のライフスタイルやアイデンティティといった文化的側面をも形成し、中産階級と労働者階級との間の境界線そのものを生み出した」（大和 1999: 114）と指摘する。子どものいない主婦にとってメイドの雇用によってホテルのような清潔さを家庭に持ち込むことができる。しかし、主婦として家庭文化を維持するために家庭料理の担当者であることはやめ

ない。乳幼児のいる主婦は、母親一人では至難の業である子ども中心な育児をメイドの利用によって実現可能とした。しかし、メイドが子どもにかかわりすぎることを望んでいるわけではなく、あくまでも母親の補佐にとどまらせる。Lanは、台湾で有償ケアワークが単なるケアの提供にとどまらず、台湾における家庭の文化的理想の実現を担っており、中産階級家族が「家庭における親密性という理想を維持するため」に住み込みのヘルパーという慣行を生み出している」と指摘する（Lan 2010=2012:48-49）。それと同じように、フィリピンの駐在日本人主婦においても、主婦として、あるいは母親としての文化的理想の実現のためにメイドを雇用しているといえる。

5. むすびにかえて

本研究ではインタビュー調査で得られたデータに基づいて、フィリピンにおける日本人駐在員家庭の主婦におけるメイド雇用に対する認識を子どもの有無によって比較・考察した。そのうえで、メイド雇用が子育て期の母親における母親業のあり方にどのように影響しているのかを検討した。

本研究の考察から導かれる結論は、次のとおりである。子どものいない場合には、メイドへの家事の委託はあくまでも、自分がやるよりも上手にできる、つまりプロの仕上がりが期待できる家事サービスであり、主婦はそれを選択的に購入している。メイド雇用によってより高い水準の家事を導入する一方で、料理などこだわりのある家事を自らの手でやることによって、家庭を切り盛りする立場であるという自覚、つまり自身の「主婦アイデンティティ」を積極的に維持している。逆に、メイドがほとんどの家事を行うような状況では、子どもがいない場合には主婦アイデンティティは弱まるが、家事をしない代わりに趣味等を充実させて自分が精神的に安定することが家族（夫）にとってもプラスになるという解釈から、自らの役割を感情マネージに集中する。

幼少の子どものいる場合には、現実の問題としてまず人手が必要という認識がある。日本にいれば育児に関して何らかの援助を期待できたかもしれない親・親戚・公共サービスが何もない生活環境に身を置いているという状況から、緊急事態（たとえば、母親の病気やケガ、妊娠による悪阻）に備えて、メイドを雇用するという側面が強い。そのため、メイドにはひとつひとつの家事について高い水準・プロの仕上がりを求めるということよりも、途上国での暮らしにおいても母親として子どもに配慮して過ごせるようにするための補助的存在としての活躍を期待している。また、メイド雇用を前提として成り立つ駐在日本人社会においては、子どもの同伴を許可しない集まりへの出席が求められることもしばしばあるため、必要に応じてメイドが子どもの世話をできることも重要である。そのため、メイドは家事能力以上に、人柄や対人能力、信用度の高さが求められる傾向がある。幼少の子どものいる母親にとって、メイド雇用は「子ども中心主義」にもとづいて当事者理想的だと思う母親業をより効果的に実現するための手段である。それは、自分が子どもに対して何より配慮している母親であるという母親アイデンティティによって、メイドの雇用

を肯定することにつながっている。主婦・母親一人では達成しえない家庭の文化的理想の実現を、メイドの雇用によって実現しようとしているのである。

本研究においては、雇用主である駐在日本人主婦の視点から、メイドの雇用によって子ども中心主義的な母親業が当事者にとって理想に近い形で効果的に実践されているという事実を確認した。しかし実際、日本人主婦とフィリピン人メイドには雇用関係があり、私的領域に他者の事情が持ち込まれることになる。日常生活で繰り広げられる主婦とメイドの緊張関係については本研究では取り上げていないが、家庭生活の文化的理想の達成の背後にその微妙な緊張関係がつねに存在していることは確かである。

参考文献

- 上野加代子, 2011, 『国境を越えるアジアの家事労働者——女性たちの生活戦略』 世界思想社.
- 落合恵美子, 1989, 『近代家族とフェミニズム』 勁草書房.
- , 1997, 『新版 21世紀家族へ——家族の戦後体制の見かた・超え方』 有斐閣.
- 落合恵美子・山根真理・宮坂靖子編, 2007, 『アジアの家族とジェンダー』 勁草書房.
- 国民生活センター, 1998, 『第28回国民生活動向調査（平成9年度）』.
- 品田知美, 2004, 『<子育て法>革命——親の主体性をとりもどす』 中公新書.
- 清水美知子, 2004, 『<女中>イメージの家庭文化史』 世界思想社.
- 総務省統計局, 2007, 『平成18年社会生活基本調査 調査の結果 結果の概要』
(<http://www.stat.go.jp/data/shakai/2006/pdf/gaiyou2.pdf>).
- 武田佳奈, 2010, 「女性労働力拡大を支える「家庭生活サポートサービス産業」の成長」
『NRIパブリックマネジメントレビュー』 84: 2-8.
- 内閣府, 2007, 『平成19年版 男女共同参画白書』.
- 西麻里子, 2004, 「メイド雇用家庭における家事分担と主婦役割への影響——香港在住の日本人駐在員家庭のケース」 『家族社会学研究』 15(2): 110-120.
- 大和礼子, 1999, 「「家事動労」概念の再検討——英国エセックス大学大学院におけるセミナーから——」 『家族社会学研究』 11: 113-118.
- 山根真理, 「「次世代育成支援」時代の母親意識——母たちの意識は変わったか?」 『男の育児女の育児——家族社会学からのアプローチ』 昭和堂, 69-89.
- 山田昌弘, 1994, 『近代家族のゆくえ——家族と愛情のパラドックス』 新曜社.
- 山本理子, 2010, 「家庭内における非家族成員による家事の代替可能性——フィリピン駐在の日本人主婦のメイド雇用の実態から——」 京都大学グローバルCOE「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」ワーキングペーパー次世代研究11
(https://www.gcoe-intimacy.jp/images/library/File/working_paper/New%20WP/WP_NextGenerationResearch_11_YAMAMOTO_s.pdf).
- Constanble, N., 2007, *Maid to Order in Hong Kong: Story of Migrant Workers*, Second

- Edition, Ithaca and London: Cornell University Press.
- Hochschild, A. R., 1995, "The Culture of Politics: Traditional, Postmodern, Cold Modern and Warm Modern Ideals of Care", *Social Politics: International Studies in Gender, State, and Society*, 2(3): 331-346. Reprinted in: 2003, *The Commercialization of Intimate Life*, California: University of California Press, 213-223.
- Lan, P. C., 2006, *Global Cinderella: Migrant Domestic Workers and Newly Rich Employers in Taiwan*, Durham and London: Duke University Press.
- , 2010, "Culture of Carework, Carework across Cultures," in John Hall, Lura Grindstaff, and Ming-Cheng Lo, eds, *Handbook of Cultural Sociology*, London and New York: Routledge, 438-448. (=2012, 山本理子訳 「ケアワークの文化, 文化をこえるケアワーク」, 落合恵美子・赤枝加奈子編『アジア女性と親密性の労働』京都大学出版会, 37-54) .

2010年度次世代研究「フィリピン駐在日本人主婦のメイド雇用がもたらす母親業の再構築：山本理子）による成果である。

【メンバー】（）内は2010年度プロジェクト時点

山本 理子（無所属）